

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	世田谷区
園名	中町保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

“つむ”

～積んで楽しい、ともだちと楽しい、積み木を通して育まれるものは何か～

<テーマの設定理由>

早番・遅番保育を広いホールで2～5歳クラスで行っている。遊びのコーナーを設定し、異年齢でじっくり楽しむコーナー設定ができる。その中で幼児クラスのカプラやレンガ積み木での積み上げる姿に刺激を受けて仲間に入り、積み方を見て真似ている。子ども同士での積み上げ方がマンネリした場面では保育者が遊びこむ中で新たなきっかけをつくるなどしているが、子どもならではの発想に予想以上のあそびの広がりが見られる事もある。“つむ”事を基本に積み木の素材や種類を増量していくことで豊かな表現力や子ども同士のやりとりの深まり等育まれるものは何かを探求していきたい。

2. 活動スケジュール

<9月>

- ・クラスのテーマをもとに保育で育みたいものを話し合う
- ・積み木を追加購入して各クラスや早遅番で常設していく
- ・積んで楽しい
- ・じっくり一人で楽しい

<10月>

- ・友だちと一緒に楽しい
- ・イメージを共有して作ってみよう

<12月>

- ・実践の振り返り・子どもの姿の気づき・次年度に向けて

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ・いつでも積み木遊びができる環境作りをして、積み木の量を増やす。
- ・積み木の扱い方をはじめに丁寧に知らせる。
- ・積み木を収納できる収納・可動できるような木製カートを購入し、ホール・クラスに設定。
- ・月曜日から積み上げた積み木をとっておき、継続して楽しめるようにしていく。
- ・室内に積み方の写真を貼り積み方のヒントになるようにしていく。
- ・クラスの玩具にブロックの常設を無くしていく。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ・ 9月：①つんでたのしい ～積み木の楽しさを知るきっかけになる関わり～
②じっくりあそぶ ～色々な積み方でイメージを膨らませて楽しむ～
- ・ 10月：③友だちと ～異年齢の関わり～



<活動中の子供の姿・声、子ども同士や保育者との関わり>

9月：①つんでたのしい

レンガ積み木を保育者が縦に高くなるように積んでいくのをそばでじっと見ている児は、自分でもやってみたくなりレンガ積み木を手に取り同じように積んでいきました。縦、縦、横と置き方を見ていたので保育者の続きからのせていきます。積み木の端と端がズレながら積んでいくと途中で崩れました。「こわれたね」「はしとはしをあわせてぐらぐらしないようにつんでみよう」と保育者が声をかけると前回よりも高く積みあがりました。高くなるに連れてそっと積み木をのせていく姿があり座った状態からの目線よりも上まで積み上げると「たかくなってきたね」と、さらにのせては保育士と目を合わせると緊張した表情でした。

②じっくりあそぶ

積み木を高く積んでみたり、横に並べて家のイメージで構成したりレンガ積み木を楽しみます。次に積み木を横に並べたり四角いコーナーを作ったり、重ねてみたり横長に積んで壁ができていきました。一通り積みあがると「せんせいおうちできた」と声をかけてくれました。積み木を並べ1, 2個重ねて壁やテーブル、ベットのイメージで家の中が出来上がっていてその一つ一つを「これは〇〇で。」と保育者に知らせながらやり取りを楽しみました。



10月：③友だちと ～異年齢の関わり～

様々な形やカラーの積み木があります。その中で同じレンガ積み木のカラーとナチュラルを組合わせていきました。色の変化を活かしながら積む中で家や壁を構成していき、楽しさが広がっていきます。またレインボー積み木ではアーチを活かしてミニカーを走らせ、木玉ボールを転がす道をつくっていきます。動きのある遊びに変化したことで興味のある子がさらに仲間に加わりました。その中で順番を待って木玉ボールを貸し合ったり好きな色の車を分け合う姿がありました。色を集めたくて貸せない姿、沢山使いたい姿もありましたが保育者はその思い一つひとつ互いに伝えていく声かけをしていきそれぞれの楽しみが満足し遊び切れるよう関わりました。



5. 振り返り

積み木の環境を整える中で。

*ブロック遊びが多くなり積みきであそぶ環境が少なくなっている現状をみてまず、子どもが手に取りやすい配置を見直し保育者自身も遊びこんでいく事で子どもの遊びに新たなきっかけづくりをしていく必要性を感じた。

*可動式カートから自由に取り出せることで自由度が高まった。クラス・ホールを越えて遊びが広がった。

構成する力が育まれ好きな事、ものの表現に積み木が加わるようになってきている。

積み方に変化が出て子どもたちのアレンジが増えている。

①積んでいく楽しさが分かっていくと自分のイメージの中で世界をどう表現しようかと積み方の構成に変化が見られた。保育者の積み方をきっかけに子ども独自の発想で積む姿へとつながった。

積んで構成したものを飾りたい。

次回引き続いてやりたいと、いう姿が見られるようになった。

*「こわれちゃったね」と子どものつぶやきから保育者は「次は〇〇してみよう」と次へつながらる声かけをしていく事で子どもたちに、どうしたらいいか？の気持ちが芽生えていった。

体験したものを積み木で表現する姿へ。

②③様々な素材の積み木に触れて、日々楽しむ事で積み木あそびの面白さがわかるようになりまずは一人でじっくり遊ぶようになった。その遊びが魅力的であることに気づいた友だちが傍に来て遊びが広がっていき、子ども同士で「これはなに」と質問や「これはどう？」と提案も出てきてやり取りがはずんだ。

*“家”のイメージで完成させた世界が出来上がると、とって置きたいと、いう気持ちが芽生えている。とって置ける環境が保育室には少なく課題とを感じる。

*じっくりと遊んだ先には友だちの存在がいてその関わりから遊びがさらに広がる日常がある。その時間を保育者は大切にしたいと感じている。週末の出来事を積み木で構成して表現する姿が見られ、動物園や家の中、公園等自分が体験した事を積み木で再現していた。こうした姿から経験を遊びの中で表現する力や模倣遊びがより育まれていると感じた。

